

〈巻頭言〉

学問のスタートライン

駒澤大学仏教学部教授 石井公成

大学院の頃、研究したいと思っていたことが、ようやく出来るようになつた。四十年近くたつて、何とか研究のスタートラインに立てたことになる。ただ、子供の頃にやろうと決めたこと、大学に入る前にやりたかったことの中には、まだ手つかずのものもある。

私は小学校二年の時、腎臓を病んで日赤病院に入院した。症状は軽かつたものの、同じ病室にいた子が別の部屋に移されていくのを見、亡くなつたという話を聞いて、自分もそろそろに違いないと考えた。ただ、入院前から子供ながらに「死」というものについて考えてしまう癖があり、夜恐くて寝つけないことも多かつたため、死ねばもう恐れなくてよくなるという安心感もあつた。

小学校の担任の先生が見舞いに来てくれた際、本が大好きであつてかなり読んでいた私のために持つて來てくれた本の中に、『明治偉人伝』があつた。野村望東尼などを初めとする明治維新前後の志士や政治家たちを描いた本だ。私はこの本に夢中になつた。中でも好きだつたのは、勝海舟と坂本龍馬だつた。この病院で死ぬに違いないと思いつつ、もし退院することが出来たなら、伝記作家となつて明治維新の頃の人物について詳しい本を書き、名を残して自分が生きていた証しにしようと決めた。

中学・高校と進むにつれて、歴史好き、文学好きは次第に強まり、思想や心理学などへの関心も増していった。浪人生の頃には民俗学や芸能史も好きになり、折口信夫を読んだり、学生用の安い席で能や狂言を盛んに見たりもした。

その頃、さらに新しい要素が加わった。仏教だ。原因はいくつもある。一つは、小さい頃から関心を抱いていた死という問題、心という問題について、仏教が深い洞察を加えていたことだ。一つは、平安文学、特に『紫式部日記』に惹かれ、自己流で論文めいたものを書いているうち、仏教を知らなければこれ以上の解明はできないと思ったことだ。一つは、政治的な面からの関心だ。学生紛争がはなやかだった頃であるため、吉本隆明などを読んで戦前・戦時の転向問題を調べるようになつたところ、マルクス主義の活動家には獄中で仏教書を読んで転向し、日本や東洋の伝統に回帰して国家主義に転じた人が多い事実を知り、また逆に市川白弦のように華厳思想と社会主義を結びつけようとした人たちもいたことを知つて関心を持った。『日本書紀』など、日本の国家主義の源流も気になつた。そしてもう一つは、予備校の先生の言葉がきっかけとなり、道元の『正法眼藏』を読んでみたことだ。その極限までつきつめていく思考法と、言葉の限界を超えるかのように思われる特異な文体は衝撃だつた。いくら読んでも難解で意味が分からぬのに、語調の良い言い回しだけが頭に残つて忘れられない文章に出逢つたのは初めてだつた。

こうした要素が重なつたこともあって、早稲田大学の文学部に進む際は、東洋史ではなく東洋哲学専攻を選んだ。明治維新を初めとして近代における東洋と西洋の衝突について研究するには、まず東洋の伝統思想をしつかり学んでおく必要があると考えたのだ。平安文学にも心ひかれたが、そちらは既にあれこれ読んでおり、自分なりの研究を始めていたため、独学でゆけるだらうと踏み、苦手であった儒教の思想や仏教の教理を学ぶことを優先した。道元についても、いつか分かるようになりたいという気持ちがあつた。

大学入学後は、魯迅や武田泰淳を好んで読むようになつたうえ、東洋史を専攻していた姉が、革命運動に尽くして刑死した清末の女性志士、秋瑾を卒論のテーマに選び、その方面の本をせつせと買っていたため、こちらも清末民国初の革命家・改革家たちに関する本を読むようになつた。さらにインド独立運動についても読み始めた。そこで、明治維新、辛亥革命、インド独立運動について比較しつつ、その思想と背景を明らかにするのを一生の仕事にしたいと願うようになつた。

学部では、思想として面白く思われた華嚴教学を調べ始めた。これは、道元を理解するには華嚴を研究する必要があると、鎌田茂雄先生が書いておられたことも一因となつてゐる。華嚴思想を研究するにあたつては、近代東洋史研究の準備という事情もあつたため、当然ながらアジア諸国の比較を考えた。ところが、卒論指導会の時、私の前に坐つた小柄で白髪まじりの先生が、「君は何をやるのかね」としわがれた声で尋ねてきたので、「インド、中国、韓国、日本の華嚴思想を比較して、それぞれの国の仏教の特徴を明らかにするつもりです」と答えると、「君、そんなの無理だよ。もっとしばらなくちゃ」と言う。私は、学生が幅広く勉強したいと言つてゐるのだから、「大変だけど、頑張りたまえ」と励ませば良いではないかと腹を立て、「じゃあ、中国だけにしますっ」と不機嫌な声で答えたことを覚えて

いる。

実は、そのしわがれ声の先生は、東大から非常勤講師として出講しておられた平川先生だった。名前は知っていたが、学部での授業は受けていなかつたため、顔は知らなかつたのだ。まったく無知といふのは恐ろしい。今の私が指導教授なら、中国のうちからさらに時代や人物をしほらせただろう。

平川先生にはその後、何の相談もしないまま唐代の華厳教学に関するあやしげな卒論を書いて提出し、大学院に進んだ。ちょうど平川先生が東大を定年になつて早稲田の教授となられた時期であつたため、以後、修士課程も博士課程も平川彰先生を指導教授とさせていただいた。その頃になつて、平川先生の学識のとてつもなさが分かるようになり、敬愛するようになつたものの、不勉強であつたため、基礎的な仏教学はまったく身につかず、平川先生の学風はほんの少しも継ぐことは出来なかつた。

そもそも、東洋哲学専攻では老莊思想関連の授業が多かつたうえ、大学院では辛亥革命前夜の変法派の代表である康有為に関する原田正己先生の授業や、中国文学科の松浦友久先生の陶淵明や李白の授業などに好んで出ていた。また、心理学科にも顔を出して臨床心理学を学んでいたほか、慶應病院精神科から出講しておられた保崎秀夫先生の精神病理学の授業もとり、実習で慶應病院におもむいて精神科の入院患者さん相手に心理テストをやつたりしていたのだから、本業の仏教学が身につくはずがない。仏教用語の訓み方などは、鎌田茂雄先生が主催し、吉津宜英先生が司会と事務を担当されて東大の東洋文化研究所や駒大の資料室で開いていた高麗均如の読書会で習うことが多かつた。

大学院修了以後もあれこれふらつき続ける時代が長く続いた。学位論文を出したまえという平川先生

のご命令を受け、唐と新羅と奈良時代の日本の華嚴思想で博士論文を書いた頃、駒澤短期大学に採用していただいた。後に駒大仏教学部に移籍して主に中国仏教・韓国仏教に関する授業を担当し、日本やベトナムの仏教まで手を伸ばしたが、インド・中国・韓国・日本の華嚴思想をきちんと研究して比較するという作業はやれていない。

ただ、大学院の頃やりたかったことのうち、辛亥革命については、昨年、仏教思想学会で「辛亥革命前夜の仏教と無政府主義——章太炎と劉師培の場合——」という発表をし、この二月に『仏教学』に掲載される予定だ。芸能史については、物真似芸の歴史に関する論文をこれまで三本書いたほか、昨年は琵琶法師の源流となる高麗の偽經に関する論文を提出しており、これも二月の『駒澤大学 仏教文学研究』に載る。また、日本の国家主義の源流の一つである『日本書紀』についても、成立過程の問題に関わる変格漢文の用例を検討した論文を書いた。これは三月刊行の学部紀要に掲載される予定だ。

明治維新やインド独立運動そのものについては書いていないが、幕末から明治にかけての人物については、これまで数本論文を書いたうえ、スリランカの独立運動と仏教の関係に関しては、アメリカのシンポジウムで発表したことがある。国文学については、平安文学を中心として論文をかなり書いてきた。私が書いたものの中で学問的な貢献度が最も高いのは、この文学関連の諸論文だろう。

というわけで、冒頭に書いたように、若い頃やりたかったことのいくつかは既に手がけており、大学院の頃研究したいと思ったことの多くについても、昨年あたりからようやく手をつけることが出来るようになつた。これほど遅くなつた鈍才ぶりに呆れるばかりだが、何とか間に合つたことを喜ぶべきかも

しない。ただ、仏教を学んだことについては、本当に良かつたと考えている。仏教を知らずにアジア諸国文化や歴史を理解することはできないからだ。

研究したいこと、しなければならないことは、まだ多く残っている。そのうち、まつたくの手つかずなもの代表は道元だろう。つまり、大学院生の皆さんも私も、学問のスタートラインに立つたばかりという点では、あまり変わりがないことになる。

詩文や書には、その通底に上述したような『楞嚴經』の圓通思想等に基づく融通無礙の思想が流れていると推測できるのである。もしそうであるならば、蘇軾の書や詩文にもその思想は顯れているはずであり、この思想の表出形式に関しては、錢謙益が述べているような文體論もあるだろうし、詩における自由闊達な表現にも表れているだろう。

更に注目すべきは、上記の引用文の最後の一文にあるように、蘇軾は道に淺深があるとしていることである。これは明らかに漸修的視點であり、『楞嚴經』の特に觀音耳根圓通に説かれる思想とは相反する。確かに『楞嚴經』にはその後半部に表れるように、戒律の重視や階梯説を擧げるような漸修的視點も見られるのであるが、蘇軾の漸修論はそれらに據るというよりも蘇軾の實體驗に基づいた説であったと考える。それは、本文の最初の段において、『楞嚴經』の「戒生定、定生慧」という説に對して、慧はより速く定を生むと主張し反駁していることからもわかる。これは蘇軾が『楞嚴經』の思想のすべてをそのまま受容していたわけではないことを意味する。それにも關わらず、蘇軾がこれだけ觀音耳根圓通に基づく思想を強調していることは、その受容の深さを知ることともなろう。

バックナンバー頒布のお知らせ

『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』のバックナンバーを希望の方は、メール・はがき・封書等にご希望の号数、冊数を明記の上、当会までお申し込みください。バックナンバー掲載の論集内容については、当研究会ホームページにてご検索ください。

本誌の定期購読のお申し込み、並びに準会員制度について

当会では、本誌の定期購読の申し込みも受け付けております。年会費二千円の準会員になつていただきますと、当該年度発行の年報一冊を送付致します。また、準会員になることに伴う特別な義務・責任はありません。退会も随意です。年会費としての二千円が支払われなければ、自動的に退会扱いとなります。